

---

# オレはガードマン

ごはんライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレはガードマン

### 【Nコード】

N0727Z

### 【作者名】

ごほんライス

### 【あらすじ】

聖騎士先生の「僕はガードマン」のパロディです。併せて読むと余計におもしろいです。

(前書き)

前書きなんてクソツタレだ！

ケータイが鳴った。

「あ。守田くん？ 急に、さぼ山が休む言い出してさ。今からこれないかな」

「いいすよ」

オレは守田守夫。こんな名前をしてるせいかなのかよくわからないが、ガードマンをしている。してるといってもアルバイトであるがもう十年以上してる。小説家を目指しているので社員面接を受けてないのだ。会社から受けると何回も言われてるが断ってる。小説家は無理と判断したら受けるつもりだ。

オレはジャンパーを着て、制服の入ったかばんを下げ、アパートをたび出した。現場は、プリン町。電車に乗れば、二駅目。近い。

「ざあす」

「はいいね」

ざあすというのはおはようという意味で今は夜なのだが、ガードマン界では、仕事前はいつもこの挨拶が定番だ。

オレは早速、仕事に入る。

子供がふらふらこっちに寄ってきた。「こ、こら。ここは工事中だ。危ないぜ」「あっごめんなさい。ごめんなさい」子供、だいぶ疲れてる。「塾の帰りなんです。ちょっと疲れちゃって」「そうか。ふむ。あ。そうだ。ほれ」オレはポケットから缶コーヒーを出した。

「これ飲めよ。目が醒めるぜ。砂糖入ってるから子供でも飲めるだろ」「ありがとうございます！」子供はオレにちゅーをした。「えへへへへへ」しかし、オレは抱きしめたい気持ちを押しさえた。子供に手を出せば逮捕される。

現場の前に、車が止まった。中からサラリーマン風の背広の男が出てきた。「おいおいおいおい。こんなとこで何で工事やってんだよ。ふざけんじゃないよ」サラリーマンがオレの腹を殴った。「ぐはっ」

「責任者呼べよ！工事、やめさせるよ！工事のせいで渋滞になっちゃってるだろ！」オレは「すみません！」と言って、監督のところで走った。「監督。あのう。クレームが」監督がオレの腹を殴った。「ぐはっ」「こっちは忙しいんだ。お前が処理しろ」オレはまたサラリーマンのところに走った。「あの監督が手を離せないようにで」「ふざけんな」サラリーマンが、今度はオレの顔面にパンチを入れた。「ぐはー」鼻から血がぶしゅーと出た。「早く呼んで来い。殺すぞ」「す、すみませーん」監督のところに走る情けないオレ。監督が、オレの顔面にパンチを入れた。「ぎゃはー」またしても鼻から血がぶしゅーと出た。「忙しいってんだろ！」

オレはパニックになった。どうすりゃいいんだ。こっちに行ってもあっちに行っても理不尽の嵐。

頭がおかしくなつて、気づいたら、オレは監督を持ち上げていた。「あわわわわ。怖い。守ちゃん。おろしてー」「うりゃ」アスファルトにたたきつけた。「ぐぎゃああああああ」オレはあわてて、サラリーマンのところに戻った。「監督。死にました。もう呼べません」「ふざけんな。このちんかすめ」オレはちんかすと言われたのにかちんと来て、サラリーマンを持ち上げた。「わわわわ。怖い。おかーちゃん」サラリーマンをアスファルトにたたき付けた。「うぎゃああああああ」死んだ。

オレは、監督とサラリーマンの死体を、清掃員の人に頼んで運んでもらった。邪魔がなくなつたので落ち着いて仕事ができる。よかつたよかつた。よくなかつた。

前から、明らかにその筋と思われる男たちが歩いてくる。ブイシネマで見たことある感じの人たちだ。

「おい。兄ちゃん」

怖い。この人らはクレームの達人だ。何されるかわからん。持ち上げて叩きつけるか。しかし、そんなことすれば組のもんが黙っちゃいめえ。

「寒いな」

「ええ」

「ほらよ」

「やーさんが、オレに缶コーヒーを投げた。」

「がんばれよ」

「あざす！」

実際、優しいのは、やーさんだ。やーさんも異端児。アルバイトも異端児。異端児同士通じるものがある。クレームは主婦やサラリーマンとかの一般人が多い。一般人はオレらを汚いものを見るような眼で見てるんだ。

しかし、やーの兄貴の弟分らしいチンピラがわめいてる。「こらてめえ。そのコーヒーはあとでオレが兄貴にもらう予定だったんだぞ。兄貴はいつも、オレにごくろうだったなとコーヒーをくれるんだ。それをお前は」

怖い。めっちゃキレてる。

「おいよせ。さぶ。この兄ちゃんは寒いなか、がんばってたんだ。コーヒーで身体をあつたためなきやいけないんだ。確かにお前は今日がんなばった。三人も殺した。大成果だ。しかし、もう家に帰って寝るだけだろ。この兄ちゃんはこれからがんばらんといかんからコーヒーが必要なんだ」

「ちきしょう。ちきしょう」

さぶと呼ばれるチンピラがナイフを出した。

オレは叫びたい。なぜコーヒーひとつでこんなことに。

「あつこいつ。堅気に対して」

兄貴らしきやーが、さぶを拳銃で撃った。さぶはアスファルトに倒れた。アスファルトが赤く染まる。

「兄ちゃん。すまなかつたな」

「い、いえ」

オレは、コーヒーをぐいと飲み、コーヒーのふたに花をさして、さぶの死体の隣に置いた。

月が悲しげな顔をしている。星たちが降りてきて、さぶに雲の布団  
をかけた。  
陰。

(後書き)

泣かないで、後書き……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0727z/>

---

オレはガードマン

2011年12月2日20時55分発行